研究

西南戦争と佐伯

会員　山本　保

大分合同新聞朝刊に次の記事がのせられていました。

警察官戦没者墓地の清掃、佐伯警察署。

佐伯警察署は、八月十二日、佐伯市仁坪区にある警察官戦没者の墓地を清掃した。

この墓地には、明治十年、西南戦役のさい、佐伯地方で戦死した鹿児島県出身の長野福迫二、等巡査部ら十四柱の墓がある。

同署は、毎年、盆や彼岸の中日に清掃している。この日も、署員十人が落ち葉の清掃や草取り作業をしたあと、水と花を供え、ねんごろに冥福を祈った。（写真挿入）

佐伯史談会員河野典一氏の佐伯市仁坪、招魂所、大分市松栄山、陸軍墓地、警察官墓地の墓碑調査によって、西南役と佐伯（南海部郡も含む）が、非常に密接な関係にあることを確認させられました。

河野氏は、更に、延岡市にある陸軍墓地を調査研究されたとのことで、その成果を期待しています。

西南役の官軍の総数は六万人余り、戦死者は六、二〇〇人の多きにのぼっています。驚くべき数字です。同時に、薩軍側（鹿児島、宮崎、大分、熊本各県の士族）の死傷者も、きわめて多かったことが推測されます。

以下、戦争の経過を述べます。

西郷隆盛は、鹿児島県令大山綱良を通じて、「政府に幸問の筋があって、旧兵隊を従えて上京する」という旨を、政府・沿道の府県、鎮台に通告しました。

明治十年二月十五日、一万二千の西郷軍は鹿児島を出発して、熊本に向かいました。九州各地の士族も参加して、総兵力は三万人に及びました。

二月十九日、鹿児島賊徒征討の詔が出され、有栖川宮熾仁親王（仁坪陸軍墓地記念碑、敬慎の扁額の書者）は征討総督に任ぜられ、征討軍は、二月二十四日大阪港を出発し、二月二十六日福岡着、三月十五日久留米へ進出、熊本城に向かって南下しました。

一方北上した西郷軍は、二月二十四日熊本城を囲みました。（明治九年十月二十四日の神風連の乱のときには、熊本城はかんたんに陥落し、熊本鎮台司令長官が殺害されています。）予想に反して容易に落城せず、五十日間（二月二十二日より四月十四日まで）の攻防戦が展開され、ただ、血気にはやる薩軍の果敢な攻撃で、たがいに大きな損害を出しました。

三月四日より、田原坂の戦いも始まり、三月二十日まで続きましたが、薩軍は、だんだん不利な戦局に落ち入りました。

三月十四日、政府は、新たに陸軍中将黒田清隆と征討参軍に任命し、その征討軍は三月二十日長崎港出発、八代に上陸して、薩軍の背後から熊本城に進撃しました。そして四月一日、征討総督府と連絡がとれるようになりました。

ことに、政府は勅使柳原前光を鹿児島に派遣しました。彼は八隻の艦船を従えて鹿児島に赴き、前薩摩藩主島津久光に自重をうながし、鹿児島県令大山綱良を東京に護送するにおよんで、鹿児島県民も、はじめて、薩軍が賊軍として征討されている真相を知り、薩軍の補充は

困難な情勢になりました。

政府は、三菱会社の全部の所有船を利用して軍需輸送に当たりました。三菱汽船会社（岩崎弥太郎経営）は、政府から銀八十万ドルを借り受け、高千穂丸以下八隻を購入しています。兵隊、装備の点でも、はるかにすぐれた官軍は、つぎつぎに新兵力（名古屋、広島、大阪各鎮台）を投入し、薩軍は漸次劣勢に追いこまれました。

籠城五十日、熊本城の囲みは、とかれ、戦局は、日増きまってきました。しかし、次第におとろえたとはいえ、薩軍は、要所に人吉、都城、宮崎などの各地で転戦しながら、鹿児島の城山にたどりついたのは、九月八頃でした。敗残の薩軍はわずかに三百余人、やがて九月二十四日、征討の陸海軍の総攻撃をうけて、西郷隆盛以下悲劇的な最期をとげました。時に隆盛五十一才でした。

薩軍を追撃する官軍の本隊は、小川、八代、水俣、経して鹿児島へ。

谷干城少将（熊本鎮台司令長官）の率いる別働隊は、豊日国境（梓峠、黒土峠、赤松峠、蛇苦山、陸地峠、石神峠、津島富山）を攻撃して、薩軍掃蕩にあたりました。その本部は豊岡におかれました。

この戦いは、竹田、臼杵、佐伯、宇目、直川、蒲江、宮崎県北浦、北川、長井、延岡の各地域に関係があり、大分、佐伯の陸軍基地にも強く結びついています。

大分県に関係のある戦いについて、表を作成しました。

（　　）の数字は官軍の戦死者数。

月	日	で	き	ご	と
五月	廿九日	竹田に侵入した薩軍は放火して民家を焼失させた。			
五月	卅一日	官軍奥少佐（後の大将）三重入りをした。弥生町大向、高司幸太郎二等兵（熊本鎮台兵）戦死、二十四才。			
六月	二日	薩軍臼杵の要所占領。旧稲葉藩士は報国隊を結成し、臺城（臼杵城址）に拠って防戦、軍艦援護、日進の二隻が入港して艦砲射撃を行った。薩軍退却。敷訪山戦。（一名）			
六月	四日	宇目町赤松峠戦（二名）			
六月	十四日	大分県延岡岩崎與作篠山で戦死の況況にたおれる。四十四才。			
六月	十七日	宇目町三国峠戦で日向飫肥士族（薩軍）隊長山田宗繁以下十二名戦死。			
六月	十九日	宇目町蛇苦峠、平木戦（それぞれ一名）			
六月	廿一日	直川村赤木戦（二名）			
六月	廿二日	宮崎県陸地戦（一名）			
六月	廿四日	谷干城豊岡に（熊本鎮台本部）。			
六月	廿六日	陸地峠戦（一名）			
六月	廿五日	宇目町赤松峠戦（十五名）宗太郎峠戦（一名）赤木戦（一名）陸地峠戦（八名）薩軍五十人余り、宮崎県三河内より蒲江町葛原へ侵入、京都温良、聊かも暴力を加えず、直ちに三河内に向って去る。			
六月	廿五日	陸地峠戦（五名）			
六月	廿六日	直川村仁田原方面の指揮官奥少佐自ら豊岡に、大砲少佐は佐伯へ急行、それぞれ水援軍を要請した。			

	重岡の谷将軍は、豊後方面の最高指揮官たる旨を全軍に布告した。軍艦（官軍）蒲江附近尾越田尾駐在の賊を砲撃す。賊葛原へ退く。
六月廿八日	広島鎮台野津中佐の部隊増援し、谷将軍の指揮下に入る。
七月　一日	宇目町朝日山戦（一名）
七月　二日	飫肥藩士川越進、仁田原の官軍に投降、「薩軍新たに奇兵隊二四隊を編成、その六中隊を宮崎県八戸に置き、前一日熊田に入り、全力を挙げて豊後方面の回復を図る。」と白白した。
七月　三日	宇目町黒土峠戦（五名）　梓峠戦（六名）
七月　四日	黒土峠戦（二名）　宇目町長峯戦（一名） □□瓦戦（一名）
七月　五日	薩地峠戦（二名）　宇目町水ヶ谷戦（三名） 赤水半助森戦（二名）
七月　六日	薩地峠戦（二名）　赤水半助森戦（二名）
七月　十日	重岡の谷少将は、野津大佐、兒玉少佐と共に追撃の策を講じ、斥候を放つて敵状を探らしむ。然るに重岡、仁田原方面は薩軍の守備堅く、青山黒沢口のみは間隙ある模様、よつて佐伯駐屯野田大尉をして石神峠を攻撃せしめ、出張参謀部を置き兒玉少佐これを指揮す。
七月十一日	宇目町天狗山戦（一名）

七月十二日	広島鎮台野田大尉部隊、石神峠に出て交戦、警備四番小隊（萩原隊）は敵の背後に迂回して、これを挟撃して島平山を占拠、宮崎県三河内に入つたが、地勢悪く不利と見て島平山に退き守備を固める。
七月十六日	内水山戦（一名）　薩地峠戦（一名） 薩軍津島島の官軍を襲う。官軍敗績す。死傷五十名余り（内戦死十九名）賊軍死傷二十八名余り。萩原隊の戦死者多し。
七月廿一日	黒土峠戦（三十三名）　宇目町城の越戦（四名） 薩地峠戦（一名）
七月廿三日	宇目町畑峯戦（一名）　赤松峠戦（二名）
七月廿四日	赤松峠戦（一名）　佐伯病院戦病死（二名）
八月　二日	松尾山戦（八名）　宮崎県梅水戦（一名） 藤迫戦（一名）　城山戦（一名）　三河内三角山戦（十八名） 佐伯病院戦病死（一名） 萩原隊は松尾山、三角山戦に参加している
八月　四日	三河内三角山戦（二名）
八月　六日	宇目町蛇薗山戦（二十八名）　宮崎県蛇興山戦（一名）
八月　七日	宮崎県下尾山戦（一名）　古江村戦（一名） 萩原隊古江村戦に参加している。
八月十一日	宮崎県石谷峠戦（一名）
八月十七日	宮崎県可愛岳戦（二名）　朝日谷戦（一名）
八月十八日	朝日谷戦（一名）　熊本病院戦病死（一名）
八月廿一日	佐伯病院戦病死（一名）

八月廿二日	佐伯病院、鶴府病院それぞれ戦病死（一名づ）
八月廿四日	佐伯病院 戦病死（一名）
八月廿六日	宮府県石谷柴戦（一名）佐伯病院戦病死（一名）

備考

(1) 宮府県境においては宮府県東臼杵郡北浦村、北川村で戦闘が展開されています。そして官軍は八戸、熊田、延岡へ進軍しています。

(2) 警視〇番小隊、豊後口警視徴募〇番小隊は、萩原隊に所属しています。

(3) 佐伯病院（七名）鶴府病院（一名）熊本病院（一名）の戦病死は、真夏の季節です。痛々しい限りです。佐伯病院は四坪（昔避病院と呼ばれた建物が現在も残っています）に臨時に設けられたものと想像されます。

(4) 各地域の戦死者の累計は、左の通りです。

ところ	戦死者数	備考（戦争期間）
黒土柴	四〇	七月三日より七月廿一日迄 十九日間
赤松柴	三一	六月四日より七月廿四日迄五十一日間
陸地柴	三一	六月廿一日より七月廿一日迄 三十一日間
蛇蔓山	二八	八月六日
三河内	二〇	八月二日より八月四日迄三日間
津島畠	一九	七月十六日
松尾山	八	八月二日
梓柴	六	七月三日
赤木村	五	六月廿四日より七月六日迄十三日間

ところ	戦死者数	備考（戦争期間）
城が越	四	七月二十一日
水ヶ谷	三	七月五日
可愛岳	二	八月十七日

以下諏訪山、水木山、千束、朝日山、旗返峠、長大郎、□□尾、長峯、烟峯山、藤迫、横山、下尾山、蛇頭山、梅木村、古江村、石谷柴それぞれ戦死者一名。

いたる所で戦闘がくりかえされ、多数の戦死者が続出しています。

(5) 名古屋、大阪、広島、熊本各鎮台兵。近衛歩兵、警備隊、別働遊撃歩兵、後備軍歩兵、遊撃歩兵、及び豊後口警視（萩原隊）の警察官が戦死しています。近衛兵は明治五年に設けられましたが、官軍は熊本を結集して難局打開に邁進した跡がうかがわれます。

(6) 各県の戦死者は次の通りです。

府県名	戦死者	備考	府県名	戦死者	備考
宮城	二	東北地方（四名）	愛知	七	
福島	二	仙台鎮台兵	三重	一	
茨城	一	関東地方	滋賀	三	近畿地方（十三名）
千葉	二	東京鎮台兵（五名）	和歌山	八	大阪鎮台兵
東京	二		兵庫	一	
新潟	三		島根	二	中国地方（五十九名）
静岡	一	中部地方（三十八名）	広島	十	
長野	一	名古屋鎮台兵	岡山	二	広島鎮台兵
石川	二六		山口	五一	

府県名	戦死者	備考	府県名	戦死者	備考
対馬	一		宮崎	四	
福岡	三五		鹿児島	八	
大分	八	九州地方（八十六名）	長崎	五	
熊本	二五	熊本鎮台兵			

以上二十五府県にまたがっています。

(7) 各墓碑に士族、平民の族称が刻みこまれていることも、当時の世相を物語っています。また十七才の若い人から四十五才の初老の人まで、戦死者の中に含まれています。僧侶も喇叭卒として従軍し、戦死しています。

尚徴兵令は明治五年に実施され、明治六年に鎮台（仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本の六か所）が設けられました。

(8) 東京警視萩原隊（指揮官、三等大警部萩原貞良）は、宝珠山、鏡村、竹田、臼杵、葛原、津嶋島、松尾山、三河内三角山、蛇山、古江村の各戦闘に加わって奮戦しています。鎮台兵だけでは、兵力が充分でないので警察官（旧士族）も従軍させています。

(9) 佐伯藩士族三十二名は、佐伯陸軍墓地に一対の石燈籠を奉献しています。（明治十一年八月）一部の佐伯士族も薩軍に荷担していました。そのため佐伯は薩軍の兵火をまぬかれたそうです。

(10) 河野與一氏の「招魂所墓碑調査書」をよりどころにしてまとめました。

皆様各位のご校正を仰ぎたいと存じます。

○こぼれ話

(1) 東京銀座にある資生堂の初代は、千葉県人で海軍の薬剤官でした。薩長の横暴にいや気がさして、薬剤官をやめました。

そして、福原資生堂という西洋調剤の薬店を開きました。明治十年西南役で大当たりして、一流会社にのし上がっています。

他のクスリ屋さんも、西南役で大いに息をふき返えして、大繁盛したそうです。

(2) 日本政府にチャーターされたイギリス製鉄船ローダ又号（二、五五二t）船長ロバート・ネール・ウォーカーは、西南役の功によって、政府から感謝状並び金壱千円と甲冑一式を授けられています。輸送力増強に狂奔した政府の実態が把握されます。

(3) 文久元年（一八六一年）孝明天皇のおん妹和宮（十七才）は、公武合体策に従って降嫁し、文久二年十四代将軍徳川家茂と婚儀の式を挙げました。

当時和宮には、有栖川宮熾仁親王という、六才のときからのいいなずけがあり、結婚の日どりさえきまっていたそうです。

明治元年（一八六八年）、有栖川宮熾仁親王は東征大総督として、薩、長、土など二十二藩の兵を率いて、東海、東北、北陸の三道から、徳川軍を攻めています。その時の参謀は、西郷隆盛でした。

明治十年（一八七七年）、西南役には、有栖川宮熾仁親王は、征討総督として陸海軍をひきい、西郷軍を攻撃し、勝利を収めています。

有為転変の世の中です。冷酷な戦争の跡を物語っています。

(4) 海軍の艦砲射撃が、臼杵、佐伯、丸市尾、鹿児島でも行われていますが、非常な威力を発揮して官軍勝利への大きな原因となっています。

(四)

明治四年、中村正直（西阿陸軍墓地、東京警視萩原敬戦死之碑文撰者）訳の「西国立志篇」が発刊されました。明治五年、福沢諭吉の「学問のすすめ」も出版されました。

中村正直・福沢諭吉は、ともに明治時代の一流の学者であり、また新時代の指導者でした。

六月一日の北海道那須訓山の戦いを皮切りに、八月六日の宇目町蛇葛山戦までの六十七日間（二か月以上）は大分県境で、八月二日の梅木村戦から八月十八日までの十七日間は宮崎県境で、死闘がくりかえされています。大分県境で悪戦苦闘を重ねた官軍は、宮崎県境では順調な掃討戦を展開しています。

わたしたちは、両軍の英霊に哀悼の意を捧げるとともに、この戦争の意義を充分理解し、佐伯陸軍墓地の価値を再認識致しましょう。

（西郷隆盛が城山の露と消えた日、九月二十四日記す）

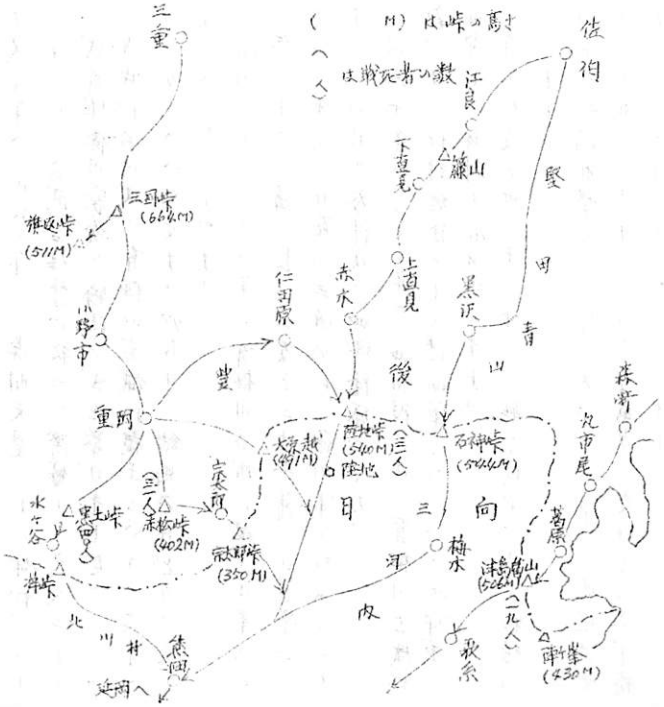
週刊「佐伯新聞」を保存しよう

（故阿南卓氏の残された郷土資料）

去る九月の中頃、元佐伯市長阿南卓氏は逝去こして逝かれた。筆者はまことに残念である。もう一度その病床をお訪ねしてお願いしたいことがあったために。

八月も末の日に近いころ、「佐伯史談」の五十五号を届けにお伺いした際、おうちの方から、別にどうとお変りないとのお答り、そして何度目かの入院助御守附を頂いて恐縮したのであったが、それからいくらも経っていない。

何回目かにお伺いした節、私は仰敬されたままの故人と、率直な話を交わした。それは「佐伯新聞」発行について注がれた情熱、苦労であり、その新聞のもつ郷土資料としての評価であった。大正から昭和にかけての二十数年に亘る郷土紙「佐伯新聞」は、本会もその一部分を昨秋頂いているが、幸いにも阿南家に実に多量にその残部が保存されている。嬉しいことである。

故人が若き日に同人誌の指導に当られたことも、琉球によって佐伯の青少年達にスポーツ精神を鼓吹された事、いづれもこのうち直接筆陶をうけられた方々によって、追憶顕彰のことがなされるであろう。私達は「佐伯新聞」の残されたるを、いつまでも保存尊重したい。（了）

〔戦いの跡〕